
キッズストリート

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キッズストリート

【Nコード】

N65270

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

十九世紀ロンドンのダウンタウン。そこで殺人事件が起こった。その解決に動いたのは何と新聞売りの子供達だった。大英帝国の黄金時代のロンドンを舞台とした推理ものです。

第一章

キッズストリート

十九世紀イギリスのロンドン。当時この街は世界一の大国の押しも押されぬ首都だった。まさに繁栄の絶頂にあるとされていた。

工場が立ち並びそこから煙が沸き起こる。そして人々はその中で汗水垂らして働いていた。

「やっと俺達の生活が言われるようになったな」

「ああ、本当にやつとだよ」

「全くだ」

その働いている労働者達はパブでこんな話をしていた。飲むのは当然エールだ。それをがぶ飲みしながらそのうえで話をしていた。

「何だかんだでな」

「これまで凄かったからな」

「だよな。何時倒れるかわからない位な」

「洒落にならなかったよ」

「女房やガキが働いて」

賃金の関係でそうなっていたのだ。

「俺達は家にいたりとかな」

「半日は働いていたりとかな」

「しかも食うものも住む場所も酷いもんだしな」

「死ねっつていうのと同じだよ」

産業革命の時代である。そうした様々な問題も浮き彫りになってきていたのだ。だがそれが次第にあらためられてもいつていたのだ。そして彼等が街に出るとだ。石造りの建物が並ぶ裏通りにおいてだ。子供達が新聞を配って回っていたのである。

「さあ号外号外」

「安いよ」

「買っておくれよ」

「けれどガキはまだ働いてるな」
「新聞売りか。あれは子供じゃないとな」
労働者達はその子供達が新聞を売っているのを見ながら述べた。
「どうしようもないからな」
「だよな。それじゃあここはな」
「買ってやるか？」
「そうするか？」
「ああ、そうするか」
「こつ話をするのだった。」
「小銭もあるしな」
「号外つてのも気になるしな」
「おい、坊主」
そしてだ。彼等はだ。子供達のうちの一人に尋ねたのだ。
「号外つて何だ？」
「何があつたんだ？」
「ああ、切り裂きジャックが出たんだよ」
その子供はこう彼等に答えた。そのロンドンのスラム街に出て娼婦達を手術用のメスで次々に切り裂いて惨殺したという殺人鬼だ。その正体は今もわかつておらず専門の研究者までいる程だ。
「またね」
「おいおい、ジャックはもう消えただろ」
「一体何時の話だよ」
労働者達はその子供の言葉に肩を竦めさせて返した。
「あいつがまたロンドンに舞い戻ったっていうのか？」
「嘘じゃないのか？それって」
「嘘じゃないさ」
子供はそれは確かに言った。
「けれどね」
「けれど？」
「何かあつたのか？」

「このジャックはあのジャックじゃないよ」

要するに別人だというのがだ。

「第二の切り裂きジャックさ。出て来たのはベーカー街」

「おいおい、そこかよ」

「そこに出て来たのか」

「殺されたのは若い女性」

そこも違った。ジャックが殺したのは中年のくたびれた娼婦ばかりだった。それでその年代の女性に恨みがあるのではとさえ言われた。

「そこが違うよ」

「何か仕事場を変えたのか？」

「それとターゲットも」

「いや、今度のジャックはメスを使わないんだ」

子供はこのことも話した。そうしてだった。

「もっと知りたいよね」

「ああ、興味が出て来た」

「それで今度のジャックはどういう奴なんだ？」

「知りたかったら新聞を買ってくれよ」

言うのはこうだった。

第二章

「わかったね。それじゃあね」

「よし、それじゃあな」

「買わせてもらうぜ」

「早速な」

こうしてだった。労働者達はその号外を買った。そこには確かに謎の殺人鬼の話が一面にでかかど載っていた。その号外はかなり売れた。

そしてそれを売った子供達はだ。仕事を終えてそのうえでだ。道端に集まってそのうえでパンと水を食べながら話すのだった。

ロンドンの裏通りにはコックニーが飛び交う。石畳の路は左右に小石が転がりそこを鼠や猫が歩き回っている。時折野良犬も見える。お世辞にも奇麗とは言えないその路の端に座ってだ。そうして話すのだった。

「今日も売れたね」

「そうだね」

「それはよしだね」

こう言って笑顔で話をする。固いパンを水で流し込みながら。そうしてだ。ここで茶色の髪の子供が言った。

「それにしても誰なんだろうね」

「誰って？」

「誰がつて？」

「だからさ。今度の切り裂きジャックだよ」
それが誰かというのであった。

「ベーカー街のジャックね」

「ええと、殺した道具は鋸に斧かあ」

「それでバラバラに切り裂いた」

「随分残酷な奴だね」

「しかもだよ」

茶色の髪の子供はさらに話した。

「まずは首を絞めて殺してゐるっていつし」

「あのジャックとは全然違うね」

「そうだね」

「あいつはメスだったしね」

「ベーカー街にいて首を絞めて殺してそれで鋸と斧でバラバラにした」

わかるのはこのことだった。

「さて、一体誰かな」

「何かさ」

青い目の子供がパンをかじりながら言ってきた。

「それって限られてない？」

「限られる？」

「そうかな」

「うん、限られるよ」

こつ仲間達に話すのだった。

「それってね」

「具体的に誰？」

「どういった奴だっていうの？」

「それはわからないよ。たださ」

青い目の子供はさらに話す。

「手掛かりはあるよ」

「そうだね」

黒髪の子供が頷いた。

「鋸に斧」

「それにベーカー街」

「これだよ」

「うん、首を絞めるのはよくあるから」

黒髪の子供はそれはとりあえず置いていた。

「問題はその場所と道具だよ」
「鋸に斧ねえ」
「どういった仕事の人が持つかな」
「一体」
「他に手掛かりない？」
「今度は緑の目の子供が言った。
他には」
「ええと、両手で首を絞めた？」
赤髪の子供の言葉だ。
「そうあるね、後ろからね」
「後ろからね」
「それでなんだ」
「それで被害者の女の人は」
赤髪の子供の言葉が続く。
「若くてブロンドの美人」
「仕事は娼婦」
「夜に歩いている時に襲われた」
こっつ話されていく。

第三章

「犯人の手掛かりが少ないね」

「いや、どうかね」

しかし青い目の子供が行った。

「それは」

「多いつて？」

「そうなの？」

「うん、娼婦がどんな仕事がよく知らないけれど」6

これは子供だからだ。幾らお世辞にも品がいいとは言えないダウンタウン育ちでもだ。子供が娼婦の仕事の内容まで知っている筈もなかった。

「お客が必要らしいし」

「じゃあそのお客を調べる？」

「そうする？」

「そしてね」

青い目の子供がさらに話す。

「斧と鋸だけねど」

「ああ、それだね」

赤髪の子供がそれに反応した。

「貴重な証拠だよね」

「問題はその証拠が何処にあるかだね」

黒髪の子供が言う。

「鋸と斧は」

「使う仕事はあるね」

今言ったのは茶髪の子供だ。

「大工さんとかね。木を切る時ね」

「あっ、そうか」

「そっだよね」

「それは」

他の子供達もそれを聞いてそれぞれ話す。

「じゃあ犯人は大工さんかな」

「それかな」

「いや、決め付けはできないね」

今言ったのは緑の目の子供だ。

「ここはね」

「うっん、じゃあ僕達で調べる？」

「そうする？」

自然とそんな話になった。

「それで犯人を見つけようか」

「そうしようか」

「まずはベーカー街に行こう」

青い目の子供が言った。

「そうして皆で調べよう」

「よし、それじゃあ今から」

「そうして」

こうしてだった。全員でそのベーカー街に向かう。やはり石畳の路に煉瓦の建物が並んでいる。子供達はその街中に来たのである。

そしてまずは事件現場に来た。勿論今はもう死体などない。

当然血やそういったものもない。事件があったことは微塵も窺えない。

しかしだ。ここで緑の目の子供が周りを見ながら言った。

「後ろから首を絞めて殺してこの場ではらばらにした」

「あつという間にね」

「そうしたらしいね」

「鋸と斧でね」

次にこの道具がまた言われた。

「すぐに切り裂いてこの場に散りばめた」

「首も手足も胴体も切って」

「ああ、それに」

黒髪の子供が「こ」で言う。

「額を斧で割ってたらしいね」

「額をねえ」

「そうしたんだ」

「恨みあったんだ」

キーワードが一つ出て来た。

「被害者にね」

「そうか。被害者に恨みがあった」

「それじゃあ被害者の知り合いだよね」

「そうなるよね」

「しかもね」

子供達はさらに話していく、次第に核心に近付くようだ。

第四章

「斧や鋸を持っている」

「ええと、そういえばロンドンでそういったものってあまり持たないし」

「トンカチとかだからね」

「そうそう」

労働者の街になっていたからだ。産業革命がそうさせた。労働者といえはやはりハンマーだ。少なくとも工場で斧や鋸はハンマー程使われはしない。

「それはないからね」

「普通にね」

「やっぱりそういうのを持ってる人って少ないし」

「それでベーカー街で事件を起こした」

「何か限られる？」

「こうそれぞれ話していく。」

そうしてだった。今度は黒髪の子供が言った。

「じゃあさ、一つの絞るって？」

「的を絞るって？」

「被害者のお客さん」

「まずはそこからだった。」

「それが知り合い。それで恨みを持ってそうな人」

「ああ、それだと結構以上に絞れるね」

「そうだね」

「本当にね」

他の子供達もそれに頷く。そうしてだった。

そのうえで被害者の近辺を調べてみる。するとその被害者に対して恨みを持っている者が何人か出て来たのであった。

全部で五人だ。そのうち二人は同業者の女に借りているアパート

の管理人だ。同業者の女は金の貸し借りで揉めており管理人は家賃の支払いが遅れていてそれで揉めていたのだ。どちらも金の問題であつた。

「お金にルーズな人？」

「そうみたいだね」

「それも結構」

被害者の人となりもここである程度わかってきた。

「けれどこの人達は違つみたいだね」

「そうだね、確かに」

「それは」

このことが話された。

「後ろから首を絞めるつて結構力いるし」

「そうそう、それも素手でね」

「それを考えたら女の人じゃないね」

「そうだね」

そうした理由からこの二人の女は容疑者から外された。そして残るは三人である。女でなければだ。残っているのは男であつた。

まずは老人である。カフェで喧嘩をしてそのうえでだ。それから会えばその都度いがみ合い対立する。そんな関係だつたのだ。

老人は大柄で今も力が強い。しかしだつた。

「仕事はケーキ屋なんだ」

「仲は悪かつたみたいだけれど物静かな人みたいだし」

「そうしたことをする人じゃないみたいだし」

「それにだよ」

ここでさらに話される。

「家には鋸も斧もないしね」

「ケーキ屋だからね」

「そうだね」

それでこの老人も消去された。残るは二人であつた。

「ええと、次はお客さん達？」

「被害者のね」

「その人達かあ」

まずは痩せて青い顔をした青年だった。何でも工場の労働者らしい。

「お客で来てそれで貢いでいて捨てられたんだって」

「ああ、振られたんだ」

「そうなんだ」

子供達はこう解釈した。

「それで怨んでるって訳だね」

「成程、それでなんだ」

「それで恨んでたんだ」

「じゃあこの人？」

茶髪の子供がここで言った。

「この人なのかな」

「どうかな。痩せて青い顔をしているし」

「手はかなり細いし」

その二つのことが話される。

第五章

「しかも家に斧や鋸もないしね」

「違うかな」

「ああ、それに」

青い目の子供が言ってきた。

「その日だけねどね。この人ね」

「この人は？」

「どうだっというの？」

「その日はロンドンにいなかったんだ」

そうだったというのである。

「その日丁度ウィンザーの親戚のところに行っていたんだ」

「ウィンザーっていったら」

「全然違うね」

「そうだね」

皆それを聞いてそれぞれ話した。

「つまりアリバイがある」

「そういうことだね」

「つまりは」

「うん、この人は犯人じゃない」

それを話すのだった。

「間違いなくね」

「それだったら一人？」

「その最後の一人になるね」

「それは誰かな」

子供達はあらためて話す。そうしてだった。

最後の一人に対して考えを巡らせるのだった。その一人はとうとうだ。

「この人はかなり怪しいよ」

「怪しい？」
「そうなんだ」
「仕事は大工でね」
最初に仕事として疑惑が浮かんだその職業だ。
「それでね」
「それで？」
「他にあるの？」
「しかも家には鋸や斧もある」
それもだというのだ。話しているのは黒髪の子供だ。
「どちらもね。しかもその二つを使うとかなり上手いらしいよ」
「かなりね」
「そうなんだ」
「そう、それなんだ」
黒髪の子供はまた話した。
「もう他の大工さん達よりもずっと凄いな」
「そんなに凄いな」
「うん、ロンドンで一番なんだって」
その腕についても話される。
「そこまで凄いなって」
「成程ねえ」
「そういえばだけれど」
今度言ったのは赤髪の子供だ。
「その鋸や斧の切り口とか凄く鮮やかで手馴れたものらしいよ」
「そうなんだ」
「そこまでなんだ」
「そう、とにかく凄いな」
こう話されていく。
「あつという間にね。夜の街で切り刻んだんだから」
「すぐに切り刻んだ」

「それだつたら」

「その人？」

「それにだけれど」

今言つたのはだ。緑の目の子供だつた。

「その大工さんね、実は被害者の人に凄い恨みがあつたんだつて」

「そんなに？」

「そんな恨みがあつたんだ」

「お金をかなり買いだけれどそれでも振られたんだつて」

よくある話だ。娼婦とはそういうものだ。娼婦はそうして金を手に入れるものだ。それがいいか悪いかは別にして娼婦とはそういうものとして割り切つて遊ばない方が悪いという話だ。

第六章

「それでかなり恨みに思っていたらしいよ」

「そういえば」

茶髪の子供も言う。

「被害者の人は額を斧で割られてるね」

「うん」

「確かにね」

「しかもいつも斧とか使っていたら力もかなりつくし」

茶髪の子供は今度はそのことを指摘した。

「そうだろ？だったら」

「やっぱりその人？」

「そうなる？」

「いや、決め付けはよくないよ」

青い目の子供がここで制止した。

「怪しいけれどそれでもね。それで決め付けたら駄目だよ」

「じゃあ決め手は何？」

「何になるのかな」

「証拠を押さえよう」

青い目の子供はこう仲間達に話した。

「証拠をね」

「よし、それじゃあ」

黒髪の子供が言った。ここだ。

「ここはね」

「ここは？」

「どつするの？」

「その大工さんの家に行こう」

こう提案するのだった。

「それでその周り、一番いいのはアパートのゴミ箱だね」

「そこだね」

「そこなんだ」

「そこを調べるの」

「そう、細かいところまで調べよう」

仲間達に話す。

「それでいいよね」

「よし、それじゃあ」

「そうしようか」

こうしてだ。全員でその大工のアパートのところに向かった。そしてすぐにゴミ箱をゴミを全部出してそのゴミも中身も隅から隅まで探した。そうしてだった。

「あっ、これって」

「そうだよ、これだよ」

「間違いないよ」

皆で見つけた。何と斧や鋸の刃に柄の部分がばらばらになって存在していた。あえて割られた様な痕跡がそこには確かにあった。

しかもだ。その鋸にも斧にもだ。血痕まであった。それで充分だった。

それを警察に出してだった。事件は終わった。証拠まで見つけられては犯人も認めるしかなかった。子供達の予想通り犯人はその大工だったのだ。

「娼婦に金を貢いで捨てられてねえ」

「それを恨みに思つての反抗だったのか」

「何かよくある話だね」

実際にこうした話は何時の時代の何処にもある。

「切り裂きジャックとは全然違うね」

「全く」

「あれは訳がわからなかったけれどな」

切り裂きジャックが謎とされているのはその動機がはっきりしないこともその一つである。とにかく何もかもが謎とされているのだ。

そしてだ。労働者達は新聞を見ながらだ。また話した。

「しかしよく犯人を見つけたよな」

「全くだ」

「こんなのどうやったんだ？」

「子供ばかりなのにな」

「そつだよ」

こつ話すのだった。今度はその話だった。

そのうえでその新聞を配る子供達を見てだ。彼等に問うた。

第七章

「御前等一体どうやって犯人を見つけたんだ？」

「推理か？」

「うん、そうだよ」

「それでなんだ」

子供達は笑顔で話すのだった。

「それで見つけたんだ」

「やっとな」

「成程、それでか」

「推理か」

「しかしな」

だがここでだ。労働者の一人が尋ねてきた。

「御前等推理だけでわからないよね」

「あれっ、推理だけじゃないのか」

「違うっていいのか」

「考えてみるよ」

彼はこう仲間達に話す。

「推理をするには情報が必要だろ」

「ああ、そうだな」

「確かにな」

「それがないとわからないからな」

彼等にもその事情はわかった。それであらためてそれぞれ頷く。

「じゃあどうやって情報を仕入れたんだ？」

「それは」

「ああ、それはね」

「つてなんだ」

子供達は笑顔でその事情を話した。

「僕達のとつてね」

「それで手に入れた情報なんだ」

「つてつていうとあれか」

「新聞売りのつてか」

「それか」

「うん、そうだよ」

金髪の子供がにこりと笑って大人達の問いに答えた。

「ベーカーにも僕達の友達がいるからね」

「それぞれいるんだ、僕達それぞれにね」

「それでわかつたんだ」

こう話すのだった。

「それでそれぞれ聞いた話を合わせていってね」

「そこから考えていっただんだ」

「そうだったんだよ」

「へえ、何かパズルみたいだな」

「全くだよ」

大人達はそこまで聞いてまた感心してしまった。

「けれどそれで事件を解決できたのか」

「そうだよな」

「うん、そうだよ」

「それでだよ」

子供達はその通りだというのだった。

「それで事件を解決できたんだ」

「話を全部合わせて考えていてね」

「いや、子供っていつてもな」

「馬鹿にできないな」

「全く」

大人達はあらためて唸った。

「そこまでできるなんてな」

「こんな小さな子供達が」

「だって。僕達この街で生まれてそれで仕事してるんだよ」

「隅から隅まで知ってるし」

「友達も一杯いるしね」

「わかるよ」

子供達は笑顔で話した。

「そういうことだからね」

「やろうと思えばやれるから」

「さあ、だからね」

「買って買って」

すかさずそれぞれが手に持っている新聞を差し出す。

「その事件のことが書いてあるから」

「全部ね」

「おいおい、そこでそう言うかよ」

「新聞を売るかよ」

「事件のことが知りたかったら読んで」

「だからだよ」

子供達の主張はそういうことだった。

「だからね」

「僕達のことを詳しく知りたいんなら買って」

「是非ね」

「ああ、わかったよ」

「それじゃあな」

大人達も笑って返した。そうしてそのうえで彼等から新聞を買うのだった。ロンドンの小さな英雄達はこの日もそれから新聞を売っていくのだった。かつての大英帝国のダウンタウンでの話である。

キッズストリート 完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6527o/>

キッズストリート

2010年11月1日22時25分発行